四国大学紀要，(A) 37：171－183，2012
Bull. Shikoku Univ. (A) 37：171－183，2012

安政南海地震を伝える松茂町の敬渝碑（けいゆひ）について

太田　剛

1．はじめに

徳島県板野郡松茂町中喜来の春日神社には、嘉永七年＝安政元年（１８５４）の南海地震の状況を伝える瀟洒な石碑が存在している。これは文字が欧陽詢風の整斉で上品な楷書で書かれ、書道の手本として優れている。その拓本を法帖に仕立て学生の教材にしようと考えた。既に法帖はできており、内容もおおよそのところは書籍によって理解していたが、２０１１年三月十一日に東日本大震災が起こり、南海大地震が近づいていることも実感し、この碑の内容面の価値に改めて注目するようになり、より詳しく調べてみることにした。

『南海地震の碑を訪ねて』（平成十四年、毎日新聞高知支局発行）によれば、南海地震は西暦６８４年・８８７年・９８７年・１０９９年・１２００年代・１３６１年・１４９８年・１６０５年・１７０７年・１８５４年・１９４６年に発生している。７００年代の記録は紛失したと考えられ、だとすればこの地域にはおよそ九十～百五十年間隔で大地震が発生していることになる。しかもほとんどの場合、南海地震は単独で起こるのでなく、東海地震とほぼ同時か、東海地震の方が早く起こっている。冬季（十～三月）は六回、夏季（四～九月）は三回で、冬季の方が多い。このうち、幕末の１８５４年の冬季に起きた安政大地震に関する石碑や記録が多く残されており、今後の被害の対策を

写真１　中喜来春日神社

写真２　敬渝碑

考える上で重要な資料になっている。１９４６年の地震に関してはあまり碑の形では残っていない。この地震はＭ８．０で安政地震の四分の一程の力で、被害も少なかったのと、この年は第二次世界大戦終了の翌年であり、大空襲を受けた徳島では石碑のような形で残す余裕は乏しかったのだろうと想像できる。それだけに、この敬渝碑の存在は現在の我々には、より重要になってくる。

ところが、近世の石碑や資料は今日とは文字環境が異なり、そのままでは現代人はその意味を充分に理解できない。近年出版された幾つかの書籍に掲載されている碑文とその書き下し文も、一部に誤訳や不詳部分があった。敬渝碑は漢文で撰ばれた七言古詩の形式をとり難解な漢字を多用しているために、専門家でなければ理解しにくいところもあるのだ。そこで、漢和辞典・歴史辞典やインターネットを参考にしてその完全現代語訳を試みた。さらにこれを撰書している人物に関しても詳しく調べた。この小論が多くの人々の防災意識の向上に役立てば幸甚である。

2．歴史的背景

嘉永六年（１８５３）には二月に関東地方に地震が起きている。六月に初めて来航したアメリカのペリー提督は、翌年１９５４年一月十六日にも九隻の大艦隊で再度江戸湾に入って羽田沖まで進出し、強圧的に横浜を交渉の場とした。三月三日には日米和親条約を結び鎖国制度を廃棄させた。幕府はこのことを朝廷に報告した。欧米列強の強大な軍事力の前に幕府の権力は低下し、それまでの幕藩体制では対応できず、天皇を中心とした「日本国」体制を望む人々が増殖していく時代である。吉田松陰が佐久間象山の思想的影響を受け、黒船に乗り込もうとして追い出されたのはこの時であり、松陰と象山はこれによって郷里に戻り獄に下っている。松陰が松下村塾を開くのはこの入獄がきっかけである。幕府はアメリカに続いてイギリス・ロシア・オランダ、その他列強と条約を結んだ。この年四月には京都大火で御所が燃え、六月十四日に伊賀上野に大地震（Ｍ７．４）、十一月四日に東海地方に大地震（Ｍ８．４）が起き、翌五日には南海地震（Ｍ８．４）、さらに二日後の十一月七日には豊予海峡地震（Ｍ７．４）が起きた。十二月二十八日には江戸に大火が起きた。坂本龍馬は１８５３年三月～５４年六月まで江戸で修行をしており黒船も目撃し、この年二十歳で高知が南海地震に遭ったことを知り急いで帰郷した。

翌１８５５年、二月一日には飛騨地方に地震（Ｍ６．８）、二月二十六日に飛越地方に地震（Ｍ６．７）が起きた。三月には再び江戸に大火が起き、十月二日には、江戸を大地震（Ｍ６．９）が襲い、倒壊家屋一万四千棟、死者四千人といわれ、斉昭が頼りにしていた水戸藩の有力な指導者、藤田東湖・戸田蓬軒らはこの時死亡している。勝海舟は老中阿部正弘の命により、オランダ人を教師にして海軍士官学校の伝習所を作る役に就いた。長崎に派遣される途中、下関で停泊中に江戸の大地震のニュースを聞いている。島津家の篤姫は、徳川家定との結婚が決まって５３年の十月に芝の薩摩藩邸に入ったものの、火災や地震のためにお輿入れは延期となって５６年まで待たされる。島津斉彬配下の西郷隆盛も江戸に滞在中で大地震に遭遇している。この当時の徳島藩主は、徳川家斉の第二十二子から養嗣子となった蜂須賀斉裕で、従弟である福井藩主松平春嶽と意見の近い立場にいた。つまり徳川斉昭の息子、一橋慶喜を推す派であり、同派には他に島津斉彬、土佐の山内容堂、宇和島の伊達宗城などがいた。

この三年間に立て続けに関東・東海・南海・中部・九州・関東で震災が起きたことになる。日本中が大揺れに揺れ、火災も多発し、外国船もたくさん来日した。これら被害の回復のために幕府は多くの資金を各地に援助せざるを得なくなり、財政的に大きな負担が生じた。幕府の力はますます弱り、その後大老職に就いた井伊直弼が安政五年（１８５８）から反対勢力に対する激しい弾圧を行ない幕府延命を図るも、地震で有力指導者を失

った水戸藩では内部抗争が激化し、攘夷派の過激分子が二年後に桜田門外で直弼を暗殺した。これによって幕府の権力は地に落ち、尊皇運動は一層流行し明治維新に突き進んでいくこととなる。一連の地震が幕府の寿命を縮め、明治維新を早めたことは間違いない。

このように、自然災害は時に国家体制にまで影響を与えるのである。昨年の東日本大震災も事態は似ているのかもしれない。特に原子力発電所事故の影響は大きく、今後の日本のエネルギー政策は大きな変更を余儀なくされていくだろう。

3．敬渝碑の内容について

石碑は高さ150㎝、幅132㎝、厚さ18㎝。台石は高さ25㎝。

維皇嘉永甲寅年　　維皇の嘉永甲寅の年、
仲冬初五欲晡天　　仲冬初五、晡れんと欲する天、
欻爾山鳴地大震　　欻爾山鳴り、地大いに震え、（注1）
堂閣人家多倒顚　　堂閣人家、多く倒顚す。（注2）
黄壤襞裂水洊沸　　黄壤襞裂、水洊りに沸き、
茅廬坍塌火忽燃　　茅廬坍塌、火忽ち燃え、
紅光数穂衝天起　　紅光数穂、天を衝きて起き、（注3）
海潮湧洶漲桑田　　海潮湧洶、桑田に漲り、
桑田既見湛似海　　桑田既に見る、湛えて海に似るを。
陵谷誰疑侑変遷　　陵谷、誰か変遷侑るを疑わん。（注4）
火也水也或可免　　火や水や、或いは免る可し。
唯恐地裂陥黄泉　　唯恐る、地裂けて黄泉に陥るかと。
加旃寒威砭肌骨　　旃に加えて、寒威肌骨を砭さし、
所在履氷又臨渕　　所在氷を履み、又渕に臨む。（注5）
未然之事無可待　　未然の事、待つ可き無し。

写真3　敬渝碑拓本（全体）

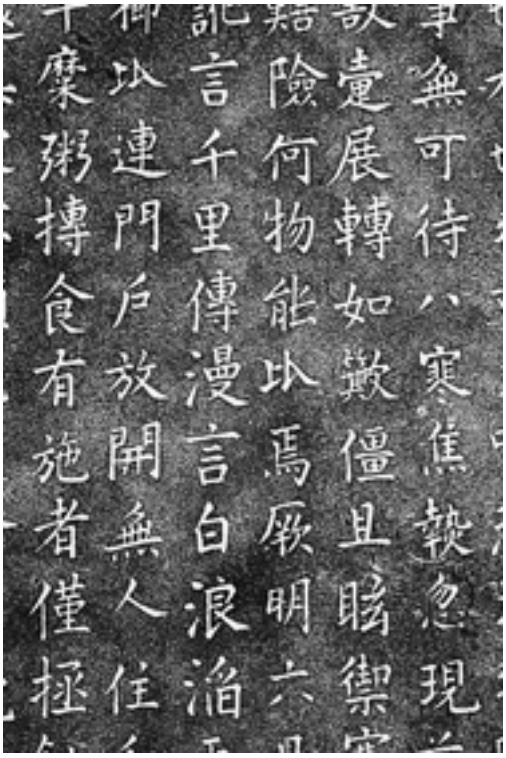


写真4　敬渝碑拓本（部分）

八寒焦熱忽現前　　八寒・焦熱、忽ち前に現われ、（注6）
心魂蕩蕩進退谷　　心魂蕩蕩、進退谷り。（注7）

縱有羽翼何得全
飛禽墜地走獸寔
展転如簸僵且眩
禦寒無褥饑無食
或坐竹中或上船
火熾水加地愈震
轗険何物能比焉
厥明六日震漸小
人意稍似解倒懸
乗敝偶有語恠者
一口訛言千里伝
漫言白浪滔天至
里民驚乱似絮翩
扶老携幼擬避浪
陸続望山櫛比連
門戸放開無人住
千村萬落絶炊煙
祠壇梵場及培塿
烏合蟻集幾萬千
糜粥摶食有施者
僅拯飢腸真可憐
在山数日如夢幻
遽然省悟初得還
雖還無家不傾危
茇舍草枕尚依然
十二月晦復大震
余震踰年猶未悛

縱い羽翼有るとも、何ぞ全きを得んや。
飛禽地に墜ち、走獸寔く。
展転 簸るが如く僵れ、且つ眩む。
寒を禦ぐに褥無く、饑て食無し。
或は竹中に坐し、或は船に上る。
火熾にして水加わり、地 愈震う。
轗険、何物か能く焉に比せんや。
厥の明くる六日、震漸く小にして、
人意稍倒懸を解くに似たり。
敝に乗じて偶恠を語る者有り、
一口の訛言、千里に伝い、
漫言・白浪、天に滔り至る。
里民の驚乱するは、絮の翩るに似たり。
老を扶け幼を携えて、浪を避けんと擬り、
陸続と山を望みて、櫛比連なる。
門戸放ち開けて、住る人無く、
千村萬落、炊煙を絶す。
祠壇梵場、及び培塿、
烏合蟻集、幾萬千。
糜粥摶食、施す者有り、
僅かに飢腸を拯う、真に憐む可し。
山に在ること数日、夢 幻の如し。
遽然として省悟し、初めて還るを得たり。
還ると雖も、家の傾危せざる無く、
茇舍草枕、尚依然たり。
十二月晦、復大いに震え、
余震年を踰えて猶未だ悛ず。

（注8）
（注9）
（注10）
（注11）
（注12）
（注13）
（注14）
（注15）
（注16）
（注17）
（注18）

自土至相千里強
沿海漁浦泊村荘
漂家流亡豈殫記
洋中商船摧在岡
十圍松杉捩泛海
遠三駿路東海傍
行旅三日不火食
湖北湖南諸州荒
浪華船死以千数
失家失資多散亡
信哉徳必勝不祥
惟吾封内少死傷
希有菑異縱如此
仁明在上任賢良
有司普行賑窮恵
耕具漁具及資糧
君不見
萬国東頭日初照
赫赫皇州神封彊
神賜前鑑非無意
般楽怠敖能釀殃
朝議新宣安政令
国家張恢親民綱
愷悌君子民父母
不騫不崩祝無量
安政第三禩次丙辰孟春上元日

土自り相に至る千里強、
沿海の漁浦、泊び村荘、
漂家流亡、豈に殫く記せんや。
洋中の商船、摧けて岡に在り、
十圍の松杉、捩て海に泛ぶ。
遠三駿の路、東海の傍ら、
行旅三日、火食せず。
湖北湖南、諸州荒れ、
浪華の船死、千を以て数う。
家を失い資を失い、多く散亡す。
信なる哉、徳は必ず不祥に勝つは。
惟吾が封内、死傷少なし。
希に菑異有るとも、縱えば此の如し。
仁明 上に在り、賢良を任じ、
有司 普く行なう、賑窮の恵みは、
耕具・漁具及び資糧。
君見ずや、
萬国の東頭、日初めて照らす、
赫赫たる皇州、神の封彊を。
神 前鑑を賜う意無きにしも非ず。
般楽怠敖、能く殃いを釀す。
朝議新たに宣す、安政の令、
国家は張恢す、親民の綱。
愷悌の君子は、民の父母なり、
騫けず崩れず、祝うに量 無し。
安政第三、禩は丙辰に次る、
孟春上元の日、

（注19）
（注20）
（注21）
（注22）
（注23）
（注24）
（注25）
（注26）
（注27）
（注28）
（注29）
（注30）

夢巌観撰文並書　　夢巌（むがん）観　撰文並びに書す。（注31）
新居謙篆額　　新居（にい）謙（けん）　篆額。（注32）
三木与吉郎光治建　　三木与吉郎　光治　建つ。（注33）
石工桑島治右エ門鐫　　石工　桑島治右エ門　鐫（ほ）る。

注

（1）嘉永甲寅…嘉永七年、旧暦の1854年十一月五日は新暦の十二月二十四日（日）である。温暖な徳島とはいえ、寒冷な時期に起きた地震である。（インターネットの「旧暦グレゴリオ暦対照表」による）
（2）欻爾…たちまち。
（3）茅廬坍塌…茅屋がくずれ落ちること。
（4）湧洶…湧き上がること。
（5）所在…いたるところ。あちらこちら。
（6）八寒…八種類の寒冷地獄である八寒地獄を指す。八種類とは次の通り。
・頞部陀（あぶだ）地獄　Arbuda
　八寒地獄の第一。寒さのあまり鳥肌が立ち、身体にあばたを生じる。
・刺部陀（にらぶだ）地獄　Nirarbuda
　八寒地獄の第二。鳥肌が潰れ、全身にあかぎれが生じる。
・頞听陀（あただ）地獄　Atata
　八寒地獄の第三。寒さによって「あたた」という悲鳴を生じるのが、名前の由来。
・臚臚婆（かかば）地獄　Hahava
　八寒地獄の第四。寒さのあまり「ははば」という悲鳴を上げる。
・虎々婆（ここば）地獄　Huhuva
　八寒地獄の第五。「ふふば」という悲鳴を上げる。
・嗢鉢羅（うばら）地獄　Utpala
　八寒地獄の第六。全身が凍傷のためにひび割れ、青い蓮のようにめくれ上がる事から「青蓮地獄」とも呼ばれる。
・鉢特摩（はどま）地獄　Padma
　意訳で「紅蓮地獄」とも呼ばれる八寒地獄の第七。鉢特摩（はどま）は蓮華を意味するサンスクリット語の音写。ここに落ちた者は酷い寒さにより皮膚が裂けて流血し、紅色の蓮の花に似るという。
・摩訶鉢特摩（まかはどま）地獄　Mahapadma
　意訳で「大紅蓮地獄」とも呼ばれる八寒地獄の第八。八寒地獄で最も広大。摩訶（まか）は大を意味するサンスクリット語の音写。ここに落ちた者は、紅蓮地獄を超える寒さにより体が折れ裂けて流血し、紅色の蓮の花に似るという。
　焦熱地獄…殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語・邪見の者が落ちる熱地獄。大叫喚地獄の下に位置し、その十倍の苦を受ける。常に極熱で焼かれ焦げる。赤く熱した鉄板の上で、また鉄串に刺されて、またある者は目・鼻・口・手足などに分解されて、それぞれが炎で焼かれる。この焦熱地獄の炎に比べると、それまでの地獄の炎も雪のように冷たく感じられるという。
（7）蕩蕩…心が定まらないさま。
（8）坐竹中…日本の昔からの言い伝えに「地震の時は竹林に逃げ込め」とある。竹は地下に根を張り巡らし、地割れしにくい。ただしこれは平地での話で、傾斜地では竹林がそのまま地滑りを起こし、かえって危険な場合もある。
（9）囏険…連悩みや危険。
（10）訛言…デマ。
（11）白浪…盗賊。
（12）絮…植物の種子についた柔らかい綿。中国では五月頃に一斉に風に乗って舞い飛ぶ柳絮（りゅうじょ）が、風物詩として漢詩に詠み込まれることが多い。
（13）山…この時、松茂町の多くの人々が逃げた山は木津山・大谷山であるという。（『松茂町誌』上巻）
　櫛比…櫛の歯のようにぎっしり立ち並ぶこと。
（14）祠壇梵場…神社仏閣。
　培塿…小高い丘。
（15）糜粥摶食…薄い粥と握り飯。
（16）遽然…あわてうろたえること。
（17）茇舎…野宿すること。
（18）十二月晦…旧暦の1854年十二月末日は三十日で、新暦の二月十六日（金）である。注1と同様のサイト）
（19）菑異…災厄異変。
（20）上…この当時の徳島藩主は第十三代の蜂須賀斉裕である。
　蜂須賀斉裕（はちすかなりひろ）

…文政四～明治元（１８２１～６８）四十八歳

江戸城で生まれた。十一代将軍徳川家斉の第二十二子。幼名は松菊、号は翼斎・橘堂。文政十年（１８２７）、蜂須賀斉昌の養子となり、徳島藩江戸屋敷に入る。襲封して十三代藩主となってから江戸城火災が起きて修復費を献じ、藩士の禄三割を削り贅沢を禁じた。嘉永三年（１８５０）、高畠耕斎を招いて医師学問所蘭学教授とし西洋医学を教えさせた。黒船来航では江戸鉄砲洲・佃島の防備を命ぜられた。以来、海防・兵制に力を入れ、英国式教練を採用、淡路の由良・岩屋に砲台を築いた。また江戸藩邸に長久館を開設し、文武向上をはかった。幕府陸海軍総裁・京都守衛に出兵後は寺島に洋学校を創設、井出三洋に蘭学を教授させた。徳川家の血筋であると共に天皇からも篤く信頼されており、佐幕と勤皇の間で心労を重ねた。斉裕はパークス配下のイギリス人外交官アーネスト・サトウの『英国策論』の日本語訳を日本で最初に読んだ人物で、慶応三年（１８６７）にイギリスのバシリスク号を徳島に寄港させて歓迎会を催している。この碑ができた時は三十六歳であった。

(21) 有司…官吏。

(22) 君不見…詩を読んでいる人に向かって注意を促す言葉。あなた、ご覧なさい。白楽天の漢詩に用法がある。

(23) 東頭…東の先端の地。

(24) 赫赫…光り輝くこと。

(25) 非無…漢文の二重否定で、「～なきにしもあらず」と読み、～ないわけではない、という意味になる。

(26) 般楽怠敖…遊び楽しみ、怠り驕ること。

(27) 朝議…朝廷の会議。この時の天皇は孝明天皇である。

孝明天皇（こうめいてんのう）

…天保二～慶応二（１８３１～６６）三十六歳

名は統仁、幼称は熙宮、号は此花・天渕。仁孝天皇の第四皇子。天保十一年、立太子。弘化三年（１８４６）践祚。同四年即位。在位二十年間。幕末の尊皇攘夷・通商条約・公武合体論等、内憂外患・国事多難の時で、その著作・消息から心労の様がうかがえる。古典に関心を持ち、歌文に堪能だった。妹の和宮が幕府に降嫁した。この碑ができた時は二十六歳であった。

安政…嘉永七年には外国船来航や地震・火災といった凶事が多発し、国威が低下したので人心の一新・国家の安泰を願って、十一月二十七日に年号を「安政」に変えた。

(28) 張恢…大いに広めること。

親民綱…儒学の『大学』の書で言う三綱の一つである「親民の綱」（為政者が民に親しむことを大切にする道徳）

(29) 愷悌…和らぎ楽しむこと。

(30) 孟春上元…旧暦の正月十五日。上元節といい、粥を作って門戸を祭る。夜は元夜といい、家々に提灯をつり、人々はそれを見て歩く。

(31) 夢巌（むがん）…寛政五～明治六（１７９３～１８７３）八十一歳

三木家の菩提寺である呑海寺の第十世住職。名は観・浄観・静観。文化十二年（１８１５）、この寺で得度し、嘉永四年（１８５１）住職となり、寺を中興した。呑海寺は春日神社に隣接し、江戸時代には神仏混淆であったので、神社の経営にも関係したと考えられる。大変美しい楷書を書いた。墓は呑海寺にある。この碑を撰書したのは夢巌が呑海寺の住職になってから六年目、六十四歳の時である。

(32) 新居謙（にいけん）…文化十～明治三（１８１３～７０）五十七歳

徳島藩士、新居春洋の長子として富田中屋敷で生まれる。幼名は謙・百太郎。通称は与一助。字は受益、号は水竹・成園。初め父春洋に学び、さらに柴野碧海・那波鶴峰・巌本贅庵・鉄復堂に学び、大阪で篠崎小竹に学ぶ。文政九年（１８２６）料理方見習で仕官し、天保九年（１８３８）父の死で家督相続した。十二代藩主蜂須賀斉昌は水竹を「唐人」と呼んで重用し政治に関する進言をしばしば採用した。嘉永三年（１８５０）斉昌に随行して江戸に行き、昌平黌で古賀謹堂・佐藤一斎・安積艮斎・大槻盤渓・大沼枕山などに学んだ。同年には徳島の出来島に邸を賜いそこに小心塾を開いた。安政四年（１８５７）には肺結核の療養で京都に滞在し、その間に貫名菘翁・家里松嶠・斎藤拙堂・土井聱牙ら諸名家と交流した。帰藩後の安政六年（１８５９）十三代藩主斉裕の侍講となり、翌年には世子茂韶の侍講を経て藩の儒官となった。茂韶に従って京都に上り、尊攘派として活躍したが、文久三年（１８６３）八月十八日の政変に遭い、池田の郷学校に左遷される。明治二年

写真５　新居水竹

（１８６９）徳島藩校長久館の学頭となって多くの後進を育てたが、三年、庚午事変の責任をとり切腹した。詩をよくし、徳島藩の多くの石碑の揮毫をしている。著に『水竹居詩鈔』『水竹居日記』『百漁詩稿』。墓は東京三田の明王院と徳島二軒屋の潮見寺の二ヶ所にある。

敬渝碑の篆額を書いたのは、水竹が昌平黌での勉強から戻って自宅に塾を開いて七年目、学者としても地位を確立しつつあった四十四歳の時である。

写真６　新居水竹揮毫
陰徳倉碑（1859年）
拓本（部分）

（33）三木与吉郎光治（みきよきちろうこうじ）

…文化五～明治十八（１８０８～８５）　七十八歳

板野郡松茂町中喜来の人。幼名は吉次郎、名は光治、通称は与吉郎、号は志成。三木家第九世。八世政治（号は奇桂）の子。藍商三木家の家業の他、父の感化で俳句を嗜んだ。天保二年（１８３１）、江戸の月並句集『春乱題句集』に二句掲載。徳島の閑日庵応吏（かんじつあんおうり・大瀧山にその建設になる句碑が二基ある）に俳句を学ぶ。句に「植え替えし松に澄みけりけふの月」。天保十一年（１８４０）庄屋となり、職にあること三十年で大庄屋に進み、安政四年（１８５７）小高取郷士となる。多くの山林・土地を購入開拓し、実業に活躍し財政面を大成した。観音を深く信仰した父の遺志に従い、村中に浅草観音堂を開創し、また大国主の神祠を建てた。最初の妻は瀬尾氏から来て四男二女を生むが先に歿し、継室の伊澤氏が一男三女を生んだ。長子の宗太郎が後を嗣ぎ十世正貢（号は菁里）となったが文久元年（１８６１）に三十歳で亡くなり、次子の宇次郎は出て山田氏を嗣ぎ、三子の助三郎順治が十一世となり貴族院議員となり、孫に衆議院・貴族院議員の康治がいる。敬渝碑を建立したのは大庄屋になってから七年目、四十九歳の時である。呑海寺の三木家墓地に葬られた。写真は墓碑。撰書は息子で十一世の順治。

※なお、この漢詩は、最初から四十四句目までは偶数句末尾をすべて発音が「en」で終わる漢字で韻を踏み、主として嘉永七年十一月の徳島の地震の状況について述べ、以後、最終句までは偶数句末尾をすべて発音が「ou」で終わる漢字で韻を踏んで、翌年の状況や他地域の状況、地震後の行政の対応および総括的な内容を述べている。これらの韻を守るために、あえて熟語を転倒させて使っている部分もある。かなり高度な七言古詩と言える。

写真７　三木与吉郎光治墓碑

現代語訳

「自然が変化することを敬い怖れる碑」

これは嘉永七年（１８５４）、旧暦の十一月五日、日が暮れようとする時間帯のことである。急に山が鳴って地が大きく震えて、建物・人家が多く倒れた。大地が割れて水がしきりに湧き出し、かやぶきの家々がつぶれて火がたちまち燃え上がり、火炎の光が穂の形になって数本天を突きあげるように起き、海の潮が湧き上がり津波となって桑畑にみなぎった。桑畑が既に海のようになれば、丘と谷には変遷があることを誰が疑おうか。

火や水からは或いは逃れることができるかもしれない。ただ恐れるの

は、地が裂けて黄泉（よみ）の世界に落ちるかもしれないということだ。さらに厳しい寒さが肌や骨に針を刺すように襲いかかり、あちらこちらで氷を踏んだり、また地の裂け目に水がたまって深い渕になるのを見たりした。

いつ起こるかわからないことを、あらかじめ待つことはできない。八寒地獄と焦熱地獄がたちまち眼の前に現われるようで、心と魂が定まらず進退に極まってしまう。もし翼があったとしても、どうして安全であることができようか。空を飛ぶ鳥も地に落ち、地を走る獣もつまずきころび、ころがるように倒れ、目が回る。寒さを防ぐにも蒲団がなく、お腹がすいても食べ物がない。ある者は竹林の中に坐り、ある者は船に上がった。火が盛んに燃え、水が増し、大地はますます震えた。世の中のどんな悩みや危険も、この恐ろしさに比べることはできない。

その明くる六日、地震はようやく小さくなり、この時の人々の気持ちは、まるで「逆さ吊るしの刑から解放された感じ」だった。このような社会の衰えに乗じて、ふとおかしなことを語る者があり、その一言のうそ偽りが千里に伝達してデマとなり、また盗賊が世の中にはびこった。

里人たちは驚き乱れ、植物の種子についた綿がひるがえり飛ぶようにふわふわと心が不安定になり、老人を助け幼児を抱いて、津波を避けようとして、続々と山に向かって連なって歩いた。門の戸を開け放って逃げ、家に留まる人はおらず、多くの集落では煮炊きの煙も絶えた。神社仏閣および小さな丘には、多くの、秩序なき群衆が集まった。ここに薄い粥や握り飯を施す者があり、わずかに人々の飢餓を救ったのはいじらしいことであった。

山に避難していた数日間はまるで夢や幻の中にいるような感じだったが、ふと省みてようやく我にかえり、初めて家に戻ることができた。しかし、帰るとはいっても、すべての家は傾いて危険であったので、家に泊まれずに、野宿して草を枕に寝て、山に避難している時と何の変わりもなかった。

旧暦の十二月三十日、また大きな地震があり、余震は年が変わってもまだ止まらなかった。土佐より相模に至る太平洋の長い沿岸の漁村や集落で、あまりに多くの家が流され無くなったのを、どうしてすべて記録することができようか。海上の商船は破壊されて陸に乗り上げ、周囲を十人で抱えるような大木の松や杉も、根ごと抜けて海に浮かんだ。遠江・三河・駿河（静岡県から愛知県）の東海道を旅ゆくこと三日間、火を使った食事は一切できず、琵琶湖の北も南も諸地域が荒廃していて、大阪で亡失した船は千艘を数えた。家を失い、財貨を失い、多くの人々は離散し行方不明となった。

でも、本当のことなのだなあ。徳が必ず不幸に勝つというのは。なんと、わが徳島藩の領内では死傷者がたいへん少なかったのだ。まれに災厄や異変があったといっても、例えば先ほど述べたことぐらいだった。上に慈愛輝く為政者がいらっしゃって、賢く良い役人を任命し、その役人たちはすべての人に救済事業を行ない、耕作道具・漁具、および財貨・食糧を恵まれた。

あなた、ご覧なさい。万国の東の先端にあって、太陽が世界で最も早く照らし、光輝く皇国である、この神の領域、日本国を。今回のこの災害は、神がお与えになった「教訓」の意味がないわけではないだろう。あまりに遊びほうけていて、やるべきことを怠け、驕り高ぶることは、必ず災いを醸成するものなのだよ。

朝廷は会議して新たに宣言された。新しい年号「安政」の政令を。この国家は、為政者が民に親しむことを大切にする道徳を大いに広めた。和らぎ楽しむ君子は、人民の父母的存在と言えるだろう。欠けることも崩れることもない。これを祝福することは、はかりしれない。

安政三年（１８５６）丙辰（ひのえたつ）の歳の旧暦の一月十五日、

夢巌浄観が文章を作って揮毫し、新居水竹が篆額を揮毫した。
三木与吉郎光治が碑を建設し、石工である桑島治右エ門が彫った。

4．聯芳塔について

呑海寺境内に「聯芳塔」と刻した無縫塔がある。塔身の下にある円柱形の台石に墓誌が彫られている。敬渝碑の撰書者である夢巌の履歴に関しては、川田住職のご協力で寺の過去帳にある内容を前記したが、この地は水害に何度か遭ってより詳しい資料は流されてしまい、その他の関連資料はこの墓誌だけという。厚く苔むして刻字が読みにくかったので、苔を掃い拓本を採って内容を確認した。尚、刻字されている円柱の台石は高さ28cm、直径45cm、刻字部分の幅は110cm、一行8文字、20行である。

写真8　方広山呑海寺

写真9　聯芳塔

原文

聯芳塔

特賜大悲妙感禅師法嗣、夢巌座元住方廣山、造立無縫塔於其山、歛先師設利、以為傳法初祖焉。且嘗云、承嗣禅師之法而住此山者、願同寿域師資壹塔共待龍華之春矣。一日来諗予曰、塔既成然猶未安名宓、請塔号於予焉。予聞之以為。蓋是欲聯禅師之余芳以傳后昆者矣哉。余亦有不可辞之緑。因命之謂聯芳塔爾。

慶応三丁卯孟春、現龍音　賜紫沙門大震誌焉。法孫武玄嶺謹書。

写真10　台石の刻字部分

写真11　聯芳塔台石拓本（部分）

書き下し文

聯芳塔

特賜大悲妙感禅師（注1）の法嗣、夢巌座元（注2）、方広山（注3）に住し、其の山に無縫塔（注4）を造立し、先師の設けし利を歛めて以て伝法初祖（注5）と為す。且つ嘗て云く、「禅師の法を承け嗣ぎ此の山に住せし者は、寿域（注6）を師と同じくし一塔を資して共に龍華の春を待つことを願わん。（注7）」と。一日来りて予に諗げて曰く、「塔は既に成り、然れども猶お未だ安名（注8）は宓んぜず。」と、予に塔号を請う。予之を聞きて以て為す。蓋し是聯なる禅師の余芳（注9）以て后昆（注10）に伝えんと欲する者ならんや。余亦辞す可からざる縁有り、因りて之に命ずるに「聯芳塔」と謂うのみ。

慶応三、丁卯孟春（注11）　現龍音（注12）　賜紫沙門大震（注13）誌す。

法孫武玄嶺（注14）謹みて書す。

注

（1）特賜大悲妙感禅師…玉潤元寔のこと。
玉潤（ぎょっかん）…明和八～安政三（1771～1856）八十六歳
京都の出身。名は元寔（げんぜ）、号は半偈斎（はんげさい）。十六歳で詩を岡魯庵に、文を大興に学ぶ。二十歳で備中の大雲、武州の俄山、京都の隠山の下で修業した。錬修十余年、徳島助任の興源寺に来て主僧となり、僧に文学を教えた。禅林の双璧と讃えられ全国的に阿波禅として有名になり、集まる僧は数百人を数えた。文名も高く、詩文・書をよくし琴を弾じた。特に七言律詩に巧みで、古賀精里・篠崎小竹・斎藤竹堂らと親交があった。

（2）座元…禅宗で出家得度し、立身した者の法階を指す。

（3）方広山…呑海寺の山号。呑海寺は、徳島県板野郡松茂町中喜来牛飼野東越21にあり、臨済宗妙心寺派の寺院。文禄二年（1593）見性寺より才叔が移住して創建した。松茂町の有名な藍商三木家の菩提寺である。播磨三木城の別所長治が天正八年（1580）に豊臣秀吉に攻められ自刃し、その一族の別所規治が再起を図るも果たせずに阿波板野郡中喜来のこの地に逃れて、稲田氏配下の舟師となり、大阪の陣で武功を挙げ三木与吉郎を名乗る。二世高治からは藍商として活躍し、歴代奮励して、明治以降も政財界をリードし現在に至る。

（4）無縫塔…卵形の塔身の下に蓮座・受台・八角竿石・基台などを積み重ねた塔。おもに僧侶の墓として建てられる。卵形塔身に縫い目がない（一つの石だけで構成されている）ことから無縫塔の名がある。

（5）伝法初祖…新しい仏法を伝える初めての僧。この場合は、白隠の法統を阿波に持ってきた玉潤を指す。白隠は日本臨済宗の中興とされている。

（6）寿域…生前に建てる墓地。

（7）龍華の春を待つ…弥勒菩薩が釈迦入滅より五十六億七千万年後にこの世に下生し、龍華樹（弥勒菩薩の菩提樹）の下で成仏して法を説くと信じられている。僧侶も死後に無縫塔になって、その日を待つという意味。

（8）安名…禅宗で、新しく得度受戒した僧に戒師が法名を与えること。また、そのときの文書を云う。この場合は無縫塔の名号。

（9）余芳…「残った香り」の意から転じて、死後まで残った誉れの意。

（10）后昆…子孫。後世の人々。

（11）慶応三丁卯（ひのとう）孟春…1867年、旧暦一月。

（12）現龍音…見性寺（けんしょうじ）の山号が龍音山（りゅうおんざん）。現在の見性寺の住職の意である。なお、見性寺は板野郡藍住町の勝瑞城内にある古刹である。小笠原長之がその父長房の追福のために宝治年間（1247～48）阿波半田に開基したものを、永正年間（1504～20）に三好長基が父の之長菩提のために勝瑞に移し、才寂禅師を中興開山として見性寺と改称した。三好氏が細川氏の執事として勢力を盛んにして、特に長慶は京に出て主家細川晴元を倒して幕府の実権を握ったため、この寺院は当時阿波の中心的寺院となった。三好家三代の墓が存在する。現在は無住となり鳴門市正因寺の住職が兼務している。

（13）大震（だいしん）…寛政四～明治三（1792～1870）　七十九歳
名西郡の出身。名は慧旦（えたん）、号は瑞華室。十歳の時に阿波の興源寺に入寺して大室の下で剃髪し、その後八年間修行し文化六年（1809）十八歳のとき板野郡勝瑞村の見性寺に移った。更に美濃の隠山、尾張の卓洲、備前の太元、伊予の行応らの下で修行後、三十六歳で興源寺に入った。藩主の命により阿淡で募金し、興源寺の方丈・庫裏・玄関等を再建した。天保四年（1833）の夏に興源寺で玉潤が維摩経を九十日間講じた時に大震が補佐役として活躍した。その後、見性寺に移って再中興となり五十六歳で開堂した。安政六年（1859）には勅任によって妙心寺に住した。万延元年（1860）には見性寺と雲水庵で法莚を開き、阿波に禅風を振起した。晩年には中風に罹り、七十四歳で弟子承応に見性寺の後を託して隠居した。墓は見性寺にある。この碑を撰文したのは、妙心寺住職を引退して見性寺に戻って四年目の七十七歳の時である。

写真12　龍音山見性寺

写真13　大震の墓

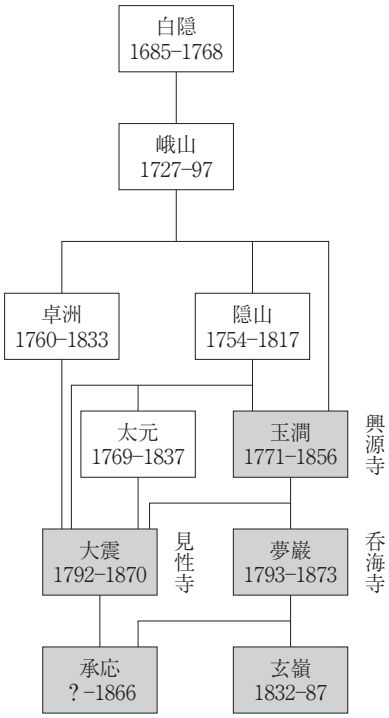
（14）武玄嶺…呑海寺の第十一世住職だった玄嶺武大。
玄嶺武大（げんれいぶだい）

…天保八～明治二十（１８３２～８７）五十六歳

夢巌の下で修行し、嘉永二年（１８４９）呑海寺で得度し、明治元年（１８６８）第十一世住職となる。鳴門岡崎の船御殿を移し本堂として再建し、呑海寺の発展に尽力した。この碑の揮毫をしたのは、住職になる一年前の三十六歳の時である。

これまで登場の僧侶はすべて臨済宗に関連している。人名辞典を調べ、呑海寺・正因寺の両住職に教えて頂き、法統を整理したのが次の図である。グレーで塗りつぶしたのは徳島の寺院の僧侶である。

登場する臨済僧の法統図



現代語訳

玉澗禅師の教えを受け継ぐ夢巌は、方広山呑海寺の住職となり、ここに無縫塔を建てて、玉澗禅師の教えを集めて、禅師を新しい仏法を伝える初祖とした。また以前こんなことを言ったことがある。

「玉澗禅師の教えを受け継いでこの寺院の住職を勤める者は、同じ墓域に葬られ、また一つの塔を建ててそこに魂を乗り移らせて、共に後の弥勒菩薩の登場する時を待ちたいものだ。」

ある日、私のところに来て、

「塔は既に出来上がったが、まだ安らかな名前が付けられていない。」

と言って、私に塔号をつけることを頼んだ。私はこれを聞いて塔号を作った。思うに、これは連続する偉大な禅師の、死後まで残る誉れを後裔にまで伝えたいと願うものに他なるまい。私はこの依頼を断わるわけにはいかない深い縁があり、そこでこの塔にあえて「聯芳塔」（芳香を連ねる塔）と歴代住職の墓として一般的な名を付けたのである。

慶応三年（１８６７年）、丁卯（ひのとう）の旧暦一月、現在の龍音山見性寺住職の大震が文章を作り、法孫である呑海寺の玄嶺が揮毫した。

5．考　察

大地震で大きな地割れや津波、倒壊・火災などがあったにも拘わらず、徳島藩では幸いにも死傷者がほとんど出なかった。民衆の間に地震対策の伝承があり、早めの避難と徳島藩の救済事業がうまくいったためである。しかし、呑海寺の川田大道住職によれば、松茂町は海抜も低く、この寺の場所は津波の際には海岸からというよりも、旧吉野川の方から先に水が押し寄せてくるという。昔からの何度かの津波や洪水で、被害を受けて亡くなった、多くの名もわからぬ人々の墓石を村人が供養のために建てたものが、今も水田の脇に多く残っている。最新の科学的研究によれば、今後、昨年の東日本大震災レベルのＭ９．０の南海地震が起きた時は、この地域にも津波被害が予想される。マグニチュードは０．２上がると力は二倍になるので安政南海地震の八倍の力が加わるそうである。防潮堤などの建設は時間と資金を大量に使うし、昨年の東日本大震災の様子から見て、強大な津波の力を防ぐことは容易ではない。自然は時に私たちの予想を大幅に超える力を出す。ＴＶ報道番組で、実際に昨年の津波被害に遭った気仙沼市の人が、「我々が科学の粋を集めて作った防潮堤が何の役にも立たなかった。人間の作ったものほどもろいものはないことを実感した。」と述べ、また釜石市の別な被災者は「津波は来るものではない。襲うものだ。我々

は自然に襲われるのだ。戦うのではなく、まずは逃げなくてはならない。」と述べていた。

原子力発電にしても、ずっと安全性を強調されて文明生活の電力を提供していた。しかし津波で壊されて以来、それは日本人にとって最も危険な存在に変わってしまった。我々現代人は科学文明の進歩に対する過信から、人間の力を驕る気持ちを知らず知らずに持たされている。結局は人間も大自然の一部であり、それを征服しようとするのは自分自身を攻撃することであり、その驕りの態度に対し、大自然は必ず無情なほどのひどい仕返しを加えるものなのだ。

周期から考えると、２０３０～２０５０年頃に次の大地震が来そうである。しかし、南海地震は東海地震とよく連動するから、間近と言われる東海地震が起きた時に連鎖反応を起こし、もっと早く起こる可能性もある。碑には次のように書かれている。「般楽怠敖、能く殃いを釀す。」（あまりに遊びほうけていて、やるべきことを怠け、驕り高ぶることは、必ず災いを釀成するものなのだよ。）この碑文から考えると、むしろ住民自身が地震の際の避難方法・避難場所・緊急食糧などを事前に確定して訓練準備しておくことと、被災後の行政の迅速な救済対策が重要になることがわかる。まさしく、碑の題「敬渝」の通り、大自然を征服するのではなく、自然の変化することを敬い恐れ、逃れ、生き残ることに力を使う方が賢明なようである。また、瓦礫を埋めた上に森を作り防潮堤を形成するなど、自然を最大限に活用した防災を考えていくべきである。

この碑は石質が良い上に風雨が当たりにくい環境にあり、建立後百五十年程の今日でも風化はほとんど進まず、文字の細かいところまでしっかり残っている。夢巌浄観・新居水竹の二人の揮毫者はそれぞれ徳島を代表する僧侶・儒学者であり、刻された書はいずれもたいへん美しく、書学者の手本になりうるレベルにある。また建設者の三木与吉郎光治も幕末の徳島を代表する大実業家で、なおかつ文化人であった。

特に今回の調査では、今まではっきりわからなかった夢巌浄観のことがわかってきた。阿波は臨済宗妙心寺派で白隠の法統を嗣ぐ有力な僧侶が多く、かつては「阿波禅」と呼ばれて全国から多くの雲水が参じた。特に慈光寺の春叢（１７５１～１８３５）と興源寺の玉澗（１７７１～１８５６）がその双璧で、夢巌はその玉澗の法統を嗣ぐ偉大な僧侶であった。書も美しいが、人物も一流である。今後も関係する人物の調査を進めることで、当時の徳島の文化の高さが解明されていくことだろう。

6．おわりに

今回、敬渝碑の内容を調査して、地震に対する準備を進める必要を実感した。このような重要な石碑の記録が、文字環境の変化によって多くの人々に正確に伝わっていないことは残念だし、書道や歴史に関わる人間が世に広く知らせていかねばならないと思う。今後も書の美しさを追究すると同時に、このような石碑を詳細に読んで紹介する仕事は重視していきたい。

ところで、実は東日本大震災以後に、書道に関する日本社会の関心が少し高まったことを感じている。現代の日本は科学文明に極度に頼っている。事故で停電になったり、携帯電話がつながらなくなったり、大風雨で電車が動かなくなったりするだけで、私たちはうろたえてしまう。文明が発達すればするほど、人間はそれに頼りきった生活をしていくので、人間自体の力はどんどん落ちていく。今後もし、何らかの大きな災害や戦争などが起きて日本全体が停電になって輸入もストップし、文明の利器を使えない状況が長く続くような状況に陥った時に、一体どれだけの人間が生き残っていけるのだろうか。

書道は古い芸術である。紙に筆と墨を使って文字を書くというあまりにアナログな芸術である。しかし電気がストップし、コンピューターや携帯

電話が使えなくなっても書道はできて、時間さえかければそれを運ぶことでちゃんと人にメッセージを伝え、人と人との絆をつなぐことができる。今日でも二千年以上前に書かれた文書や石碑がちゃんと残っていて歴史を伝えている。原型に近いものは変化に強いという傾向がある。今私が作っているこの文章のコンピューターデータが二千年後に残っている可能性はどのくらいあるだろうか。電気信号のデータは、わずかなアクシデントで一瞬のうちに消えさる危うさを持っているのである。

科学文明の脆さや危険性に気付きつつある人々は、人間の力や絆に対する再考を始めた。文字も初期の人間の文明が作り出し、多くの人々の知恵を加えて進化させてきたが、漢字の場合はそこに儒学・道教・仏教が自然主義哲学を加え、さらに日常生活に組み込みながら芸術としても醸成させた。平安三筆の一人で、我が国の書道の基本を築いた空海はその著『性霊集』巻第三の中で「古人筆論云。書者散也。非但以結裏為能。必須遊心境物。散逸懐抱。取法四時。象形萬物。以此為妙矣。」…（後漢の蔡邕の『筆論』の中に「書というものは胸中の思いを外に解き放つものである」とある。書は字形のまとまりだけでうまく書けたとせず、必ず自分の心をその対象に遊ばせ、胸中の思いを解放し、自然の運行の秩序に運筆の法をとり、万物の様々な形象に文字の形勢を似せなくてはならない。）という内容を述べている。

書の線や形には自然本来の美が存在し、それを見る者に自然への回帰を無意識のうちに感じさせる。便利な現代文明を否定し、捨て去ることは今の我々には不可能である。しかし、我々が時には筆をとって墨書を記すというアナログな行為をすることは、文明の中の自然的要素の重要なことを忘れないという初心に戻るための行為なのかもしれない。呑海寺の夢巌と徳島藩の新居水竹がこの碑を「震災記念碑」ではなく「敬渝碑」と名付けた気持ちと、書道の根底にある自然主義とはどこかでつながっている。

なお、今回の研究で、松茂町呑海寺の川田大道住職、鳴門市正因寺の奥田智山住職、中喜来春日神社の市村英雄宮司、松茂町の三木文庫に親身なるご協力を得た。この場をお借りして御礼申し上げる次第である。

参考文献

『南海地震の碑を訪ねて』　毎日新聞高知支局　２００２年
『松茂町誌』上巻　松茂町誌編纂室　１９７５年
『日本文化史体系１０江戸時代下』　小学館　１９６８年
『幕末史』　半藤一利　新潮社　２００９年
『西郷隆盛と士族』　落合弘樹　吉川弘文館　２００５年
『江戸東京年表』　小学館　１９９３年
『阿波郷土史再発見』　三好昭一郎　教育出版センター　１９７５年
『阿波人物志』　藤井喬　原田印刷出版　１９７３年
『凌霄』第１７号　四国大学　２０１１年
『阿波碑文補集』　竹治貞夫　１９９５年
『幕末の儒者新居水竹』　徳島県立文書館　２００５年
『徳島県歴史人物鑑』　徳島新聞社　１９９４年
『日本歴史大辞典』　河出書房　１９８５年
『国書人名辞典』　岩波書店　１９９５年
『漢和中辞典』　赤塚忠・阿部吉雄編　旺文社　１９８０年
『仏教用語事典』　須藤龍仙　新人物往来社　１９９３年
『図説書法論』第９巻　平勢雨邨ほか　西東書房　１９９１年
その他インターネットでいくつかのサイトを参考にさせて頂いた。